

ソ連強制抑留記

宮崎県 宮川 健 三

「ヤポンスキーサムライ」とソ連の子供まで悪口を言う。私たちが「ロススキー」と言うように馬鹿にした意味のヤポンスキーであり、「サムライ」は「野蠻人」ということだ。サムライはそんなものではなく武士道をわきまえた武人だと思ふから、彼らは私たちをのしつたと思つているが、逆に日本人の偉大さを知っているのかと反発したい気持ちになった。サムライは野蠻人ではなく、君らのように無学でもないのだと心の中では思つていた。

私は、今の北朝鮮の興南にあった旭化成の前身朝鮮窒素興南工場に昭和四年入社し、終戦当時は油脂課石鹼係社員であつた。在郷軍人歩兵少尉で、敵空襲時に発煙し目つぶしにする発煙隊長であり、一般青壮年、女子の訓練に常に率先参加した。興南の防衛部隊八八

三一部隊の小隊長として軍は昭和十八年より警備召集してゐた。そのため二カ月に一回は臨時召集をされ訓練した。

敗戦の前日八月十四日に赤紙をもらい、興南工業学校講堂にて編成が終わり、終戦のお言葉を賜り解散命令があり涙を流して自宅に戻つた。間もなくソ連軍が興南になだれ込んできた。一方、興南工場は朝鮮人の支配する工場となり、北朝鮮の居留民が時を移さず興南、咸興に押し寄せて来た。各個人の住宅は大家族となつた。食糧は極度に少なく発疹チフスが流行した。

昭和二十年の年の瀬を越す頃には毎日毎日菰包みにした死体を逢峰里の三角山に運び埋めた。土は凍結しているし深くは掘れず雪をかぶせた。その数は想像以上で大きな谷は全部墓所と化した。

昭和二十一年三月二十八日夕刻、ソ連将校により興德里部落にて抑留され、直ちにトラックに乗せられ連浦という飛行場に連行され、社宅を取調室として改装してある所に收容された。毎夜一時二時頃からピストルを突きつけられて取り調べられた。在郷軍人などと

いっても制度が違う国家なのでわかってもらえない。結局通訳が勝手な事を言つてサインをさせられ、書類を作成したのだ。

昭和二十一年五月二十七日午前十時頃、宮川、四元某三人が呼び出され、防寒外套に冬衣袴を着用させられ、君たちは今から飛行機に乗せるから待機しておれとのことであつたら、本日は都合にて延期ということであつた。

五月二十八日晴天だつた。例のごとく午前十時頃準備をして、收容所長の中佐から逃亡はするなと厳命を受けて飛行場に行った。昨年この飛行場の滑走路を八八三一部隊にて修理したのだ。この飛行場をソ連の飛行機にて飛び立つという敗戦国民とならうとは夢にも思わなかつた……。双発のダグラス機にて、三十人くらい乗れる飛行機に名前を呼び上げられて日本人三人とソ連将校、兵士十数人と共に乗り、午後一時頃出発した。飛行機は静かに昇つて行く。連浦の部落が真下に、興南も興德里も真下に見える。あの列のあの家に妻も子供もいるのだ。一瞬自然に両手を合掌した。精

練所の煙突が真下になると思つ間に西湖津を真下に見た。飛行機は少しも揺れなかつた。

本當に死を決心すれば訳なくこの人たちを殺してしまえるがなあと思う。運転台の操縦を見ている間に咸北の沿岸の上だ。ポセット湾を下に見、ウラジオストック市街が見える頃になると、今迄の平和な朝鮮の風景とは異なり真つ白な壁のソ連の家々が見えるのが、あれは魔の家だと思われてならなかつた。いやな重苦しい思いがした。三時間を経過した。飛行機は機首を下に向け着陸した。何という都市の飛行場か分からなかつた。直ちに小さい室に入れられた。またかと思つた。しかしもう帰れないのだと腹が決まつたので平気になつた。体は少し太つていたし、何でもやり何年でも生き延びてやるのだと決心した。

一泊して二十九日には自動車にて監獄に送られた。後で分かつたのだがウオロシーフ市の第八刑務所なのだ。裏には大きな建物の取り調べの家がある。東にはゲネラル中將の住宅というのがあり、身体検査を受けて室に入った。中には白系ロシア人、朝鮮人、満州

人、日本人で五十人を数えた。室は四間に五間の室だったが、このような室が八つあり、この室は七号室だった。入るや驚いた。そして不幸中の幸いともいふべきだと思える奇遇な事があった。中隊長だった田縁中尉と山崎中尉がおられるではないか。安心したという気持ちがあった。自分一人と思っていたのに同類がいるじゃないか、いかなる運命になるか計り知れないが同じ行動を取るのだから元気でやろう。我々三人は、家族の引揚げ状況はどんなになっているかなど毎日毎日、遠隔の地となった興南のことを語り合った。それがまた何よりの慰安でもあった。

この狭苦しい室に五十人も入っているのだ。室はちょうど舞台のように二階になっている。下の者はやっとのことで入っている程度の高さで実に陰気だ。二階の中央には髪もひげも真っ白の井上中将（全国在郷軍人会会長）、眼鏡の老人加藤泊次郎憲兵中将があり、二階の左側には白系の獄長と威張る奴がいる。その列には通訳だった奴らが大きな顔をしている。連中は日本人をどんなにひどい目にさせているかしのれない悪党なの

だ。満州人、朝鮮人、白系ロシア人、日本人、各民族ごとに民族性が異なる。これが食事のときに特に現れる。同じように分けるパン、一定量にするために天秤を作りそれではかり分けるのだ。全員が見ている中で当番が交互にする。それでも色目で見ている。衣食足りて礼節を知るということをしみじみと身をもって体験した。畜生と同様だ。食糧一日五〇〇グラム、カーシャ（スープ）、コーリヤンを水炊きした水っぽい雑炊が夜は出る。何も仕事をしていない者でもあまりに少ない食事だ。本当にやり切れない気持ちがあった。肴も本当に若干、野菜はほとんどなく、ビタミン欠乏は明白だ。自然に身体が弱ってくるのを覚えた。

戸外に出るのは朝食後の十五分、夕食後十五分、大便に行くときだけだ。小便是室にある樽にするのだ。室内に体臭と小便の臭気で頭が痛くなる。六月、七月、八月、室が狭いの五十人もうようよとしていたのだからとても暑苦しく、むせかえるような苦しきは例えようがない。本当に監獄というものがこのように苦しい所だということが分かった。室の北側に狭い鉄柵の

ある窓が二つある。それが高い所にあるから風は少しも入らない。カンボーイ（監視兵）が何かの用事で戸を開けてくれるのが何よりのシャバの空気が吸えるときなのだ。このときのように空気の有り難さを痛感したことはない。井上、加藤閣下とも毎日話をした。また将棋もした。話の材料もなくなり将棋もあきてくる。取り調べの話もその場で終わる。ここに来て六十五日目、どこかに移動らしいので数日前から毎日のように名前の点検がなされた。二百人中百八十人移動、二十人の重要人物は居残りになった。井上、加藤中将らは居残り。モスクワにでも連れて行かれるのだろうかと思せざるを得なかった。

昭和二十一年八月三十一日、汽車で炊事する釜やバケツなど、準備していたものが汽車に乗せられた。百八十人はどこかの地へ旅立ち輸送されることになった。数日前カンボーイが言ったことはデマだとの話だったが真実だった。「君たちは中央アジアに行くのだ」というが、そんなことがあるものか、きつとハバロフスク付近に行って伐採でもするのだろうかくらいに簡単に

考えていた。それというのも、この極東地方より遠くに離れたくない気持ちがあったからだ。遠くても極東内で、西洋まで輸送されないよう心の中で祈っていたが、ついに九月一日から動き始めた。三日ぐらいでハバロフスクに着いた。しかし降りしてくれない。十八トン車に三十人。貨物車が二段になっていて、四組に分かれて席を取っている。朝食、昼食、夕食は忘れはしない。駅に停車したときに炊事車から運ばれる。そのときの忙しさは大変なものだ。ついに予想の地ハバロフスクの街も過ぎ去った。汽車は西へ西へと、しかも激しい揺れをなし夜となく昼となく走った。鉄道は一段と高いので、白樺と赤松の林が渦を巻くようにあるのが見えた。限りなく遠い彼方まで伸びている。北極までこのような森だろうかと思われた。

何日か同じような景色が続いた。西へ西へと今日も汽車は進む。一日一日不安と不気味な感を思わせるようになる。遂にバイカル湖を右手の方に見た。汽車の中では汗がとめどなく流れる。水が飲みたくてたまらない。幸いバイカル湖にて少しの時間下車が許されて、

バイカル湖の水を飲ませてもらったときは本当にうれしかった。バイカル湖を右窓にして四日間を経過した車中の退屈が慰められた。淡水である湖が海のように広く、しかも波を見るとまるで海だ。九州全地の広さがあると聞かされた。

食事はパン五百五十グラムとスープだった。パンは十日間以後になると真っ白のカビで一杯だった。十五日でカビが黒くなった。ついに生パンは無くなったということだ。ずいぶん体が弱ってきた。野菜がないので、野菜が食いたくてたまらない。暑いのでとても水と野菜がほしかった。皆苦しきにもだえた。汽車の中でもだえている者の願いは、少しでも良いから降ろしてもらって歩くことだった。それをどんなにか毎日のように祈り願ったか。

このように苦しい長途の間でも妻や子供のことは頭から離れない。命が大事だから気をもむのはやめようと自分に言い聞かせたが、すぐに頭に浮かんできた。

ノボシビルスクに到着した。幸い下車させられて、シャワーに入り熱風で消毒した衣類に替え、頭髮を切

りまた乗せられた。ここで約半数は別行動をとることになった。若い連中が多かった。健康で無事頑張るところを祈った。いよいよ予想された通り中央アジアに向かうのだ。南へ南へと下る。生パンは無く、乾パンとスープだ。野菜なし。脚のすねの毛穴は皆真っ黒くなってきた。栄養失調によるものだ。筋肉の一部が硬くなってきた。栄養失調が激しくなると回復も遅いし大変だそう。汽車の二階から梯子を降りて車両の中央にある小便流しの樋まで来て小便するのが苦しく困難になってきた。十五日間の乾パンはいかに苦しかったか、ただただ苦しいことばかりの輸送だった。

この車中に登さんという中尉の通訳がいた。ソ連通で、父が外交官で有名である関係で抑留された人であり、本人は普通の中尉ということであったが真実は分からない。中央アジアには一回来たことがあるというので、登さんは私たちとは問題にならないほど抑留価値のある人物だと思った。登さんは次にタシケントだ、コーカンドだと教えてくれた。タシケントは天山南路の欧州と東洋を結ぶ主要道路の主要都市として昔から

知られた都で、ソ連第三の都市である。この周辺は行けども行けども尽きないような砂漠が取り巻いている。幾度となく長い隊商を見た。てくてくと歩くラクダは私たちの心のごとく淋しいものがあるように見えた。

長い砂漠の何日かを過ぎると盆地と思われる雰囲気になった。棉の畑、麦の畑、行けども行けども桑の木で区画された垣根のごとく整然と大木が低く並んでいるのを見た。今まで殺風景な砂漠で心も味気なくなっていた私たちの心を和らげたのは、初めて見る風物がパノラマのごとく移り変わりゆく姿であった。

汽車での輸送の長旅も、三十一日目によく降りることになった。夜に、到着した自動車に分乗し三十キロの所まで走らせた。荷物を各自降ろした。くだらない品をへんてこなリュックサックに入れて持ってきた。ついに来るべき所に来たのだ。皆一様に安堵と、そして一方異様な不安がよぎった。この暖かいのには雪が真っ白であるのも不思議に思えた。家屋は上を固めて作った煉瓦を重ねた小さなものである。実に異様だった。オイ、いよいよ銃殺場か？それとも絞首

台に乗せられるのかと身震いをするような恐ろしさがした。どこもこれも暗い室だったのでなおさらである。夜中の一時か二時だった。ああというため息、皆どんな状況で殺されるかが不安で、そのみを案じながら人の後を頭を下げて進んだ。行きついた所は立木の間をくぐって頭のかえるような家だった。家の中から出て来た人を見て、一瞬、また不思議だった。ドアが開くと明るい電燈の光線がまばゆいように明るく照らす。三十一日間夜はローソクの光で暮らしてきた私たちにとって、電燈に照らされたことはとても久しぶりであった。出て来た人は二十三〜二十五歳の顔も赤々とした、日本で国旗をひるがえして見送った本当の日本の兵隊だった。それを見てびっくりし、安心もした。殺されはしないぞ。生きられる喜びでわくわくとした。

散髪、陰部の毛もそられ、すべての着物は消毒場へ運ばれた。風呂に連れて行かれシャワーを浴びた。やせこけた哀れな己の体を見てあ然となった。マッサージのように揉みながらこすった。ここは保養ラーゲルで、ソ連で一番気候のよい場所だそうだ。シャワーが

済むと、逃げるのを防止するため底を厚い木で造った木靴を履かされ、綿衣を着せられ、石ころの多い遠い道を歩かされた。実はそう遠くはないのだが、体が弱りきり栄養失調も甚だしく両脚は股近くまで黒い斑点でいっぱいになり、小さい石につまづき越えることができない。本当に杖にすがりながら歩いた。いや、足を大衆に引かれて遠い道を歩いた。

キヤマ収容所は保養所であり、その位置は中央アジアのウズベク共和国で、気候、設備、衛生、病院設備などまず収容所としては最上位の方と思われた。中央アジアといっても想像もできない所で、インドの北方カスピ海の東、緯度は日本の静岡県程度でパミール高原地帯。高い山はヒマラヤ山脈、天山山脈、アルタイ山脈など七つの山脈が集まっている所の盆地で、収容所付近も三千から四千メートルの高地である。山頂は常に真っ白な姿である。スターリン峰とかレーニン峰とかもあまり遠くはないとの事である。雨が降るのは実にまれだ。一年平均二百八十六日晴天だというので、

雨も雪も実にまれだ。そのため水分のない土砂は砂のようだ。畑に水を通せば田んぼのようにぬかるみになる。畑の間には桑の木の大きなものが三メートルくらいの高さで整然と植えてある。雪の山より流れる水は実に豊かで、水流（アリーク）はいかなる所でも通っている。収容所の中にある大プールもアリークより流れ入り、常に一杯なのだ。この収容所に来た当初は常に給食が良く、毎日ニンニクとビタミンまでくれた。

十五日もした頃から作業が始められた。農場に行く組、綿くり作業組、靴編組などがあったが、私と同類の興南省の山崎、田縁、毛呂正三に宮川は靴編作業でナチャニック（作業主任）はゲルマン（ドイツ軍人）軍曹であった。靴というのは水糸（木綿の糸）でハイヒールのカバーの部分を編むので、覚えるまでがなかなか大変だった。フランス製品で、私たちが来る前はフランス人とゲルマンが一緒にいてゲルマンがこれを習得したものだ。女子用を覚えた後、男子用のものを編んだ。室内座り作業で十五人程度だったので、作業の休憩時間には野球などをやって憂うつをはらした。

昭和二十一年十月十五口、一隊が入って来た。その中に大石武夫氏がいらっしやった。大石さんは朝鮮空素では最高峰で朝鮮局長だった。不安に思っていた大石氏が元氣だったので、喜んで毎日のように会合した。二十二年三月戸外に出ていた時、鶴が二羽上空を美しく飛んでいた。何か良いことがあるのを期待したが、何という良い話も伝わらなかった。遠い遠い四面の連山頂上が常に真っ白く、夏から秋の景色は油絵にあるスイスやカシミヤ付近とそっくりだった。カシミヤの土地はあまり遠くないようだったが、国境がないところならばインドでも中国でも何年かかろうと歩こうと思った。しかし遠い遠い汽車旅行の末の、世界の屋根といわれるこの山に包まれた所では、浮世のことは忘れるより他になかった。収容所長は良い人だった。あとは元氣になり、シベリア鉄道を東へ東へとひた走りに走り、左にバイカル湖を見る日を祈るよりほかに方法は無いのだ。キヤマ収容所で過ごしたのは六カ月だった。

キヤマ収容所を引揚げ自動車で五時間ぐらい走り続

けた。やはり山の麓らしい所は見当たらなかった。鉄の寝台が待っている所だと言われていた、フェルガナ収容所に着いた。ここでの作業はアルコール工場建設で、一期工場は完成し運転中、私たちは二期工場建設だった。製造方法は綿の実から油―脂肪麦―石鹼としている。穀と綿毛を蒸して硝整処理してプレスする。アルコールを精留する方法で、これから飛行機用の潤滑油をも造るのではないかと思われた。

最初はベトン作業、これは実に重労働作業である。砂や砂利にセメントを入れ、シリカリチートを入れてミキサーを回す。ミキサーの運転手はソ連の女子だった（恐らく何かの犯罪を犯しこの地域に回され、フェルガナより外には旅行できない人たちなのだ。しかし本当に良く働き、体力もあり元氣なものだった）。一輪車の猫車をターチカといい、あらゆる作業にターチカが利用される。これにコンクリートの混ぜたのを一杯入れて押すと、初めは腰がふらつき良く押せなかったが、だんだん上手になった。中村班という作業班だったが、若い二十四、五歳の者と元氣に三カ月本当に必

死に努力した。ノルマを出すためにやかましく言われて頑張ったところ、体力が一級だったのが急に三級になった。見るからにやせこけてきて、医者が見てお尻の肉がほとんどない者は三級の体力という事だ。それ以下はOK（オーカー）といい、入院かまたは作業に出ないで収容所内で作業に当たらせられる。一、二級者は重労働、三級となると中労働だ。石炭降ろし作業に回され、真っ黒になって作業に従事した。二カ月俸給を受けた。七十円程度だった。

昭和二十一年十一月、数日間三十九度の熱が続いたが頑張り通したのが悪く、マラリアだとわかった頃、寝台（二段の上）に寝ていてろっ骨の末端をなでるとブクブクと親指大のふくれができていた。診断をしてもらったが、幸いにも病院には旅順病院長であった吉村軍医大佐と大連陸軍病院長大屋軍医大佐がおられ、二人の診断でろっ骨カリエス間違いなしと言われた。私は悲観のどん底に落とされたような気持ちがあった。収容所内の治療室へ入室させられた。マラリアは治ったけれどカリエスというふくれは一向に変化なし。二

週間、三週間、ついに一カ月となったけれど親指大のふくれは少しも変わらず、痛くもかゆくもないがとても心配だった。注射器で膿を取ったがやはり赤黄色の膿が出る。カリエスだと都合三回とった。

二十三年三月になりコーカンド病院に入院だと言われて自動車（米製）に乗って四時間。フェルガナの駅より汽車に乗せられ古都コーカンドに着いた。コーカンド病院は色々と完備している病院だった。ここは昼間は非常に太陽光線が強く、裸体では水泡ができるので住民は日本の綿入れのはんてんと同じ着物を着ていた。胸を一杯開いて思い切り日光浴をした。これがどんなに良かったか、びっくりする現象が起きた。入院後膿をとったが全然出なかった。実に不思議だと言っていた。しかし毎日太陽光で焼いてくれる。薬とビタミンと六回食の食事、病については国境もなく親切そのものであった。ドクトル（医師）は熊本医大の博士、軍医中尉がおられた。まだ若い博士だった。この病院に一カ月入院し、治癒しても三ヶ月いる病院であると言われた。三ヶ月入院したので体が本当に回復し、カ

リエスも引っ込んでしまった。感謝いっぱいでも退院したが、一難去ってまた一難というように、青白い顔で自動車に乗せられたが、待っていた所はあわただしい赤旗の鉄条網で包まれた収容所だった。

私の普段の体重は五十九〜六十二キロ。フェルガナ収容所にて大屋大佐、吉村大佐に診断を受けた頃の体重は四十六キロだった。あの時は死の一步手前だったことを自分も悟り、田縁、山崎氏なども駄目とあきらめていたという。その宮川が無事退院してきたときは、皆びっくりし喜んでくれた。吉村、大屋軍医にも天日の効果の偉大さを喜んでもらった。その後農場に行かされた。野菜、スイカ、メロン、玉ネギ、何でもできる高地で、夏は暑く冬もまた寒い所であるが、農場では地下壕の中に住むのだから夏は涼しく冬は暖かい。雨は降らなかつた。農場では監視も割合大目だった。

ある時住民の家に入って苦しんでいる主人に指圧をしてやったところ、本当にうまいメロンを二、三個ももらったことがあった。住民のほとんどは無学で、日本にはお月さまがあるかと聞く。日本には月は二つである

のだと言うとびっくりしていた。このような住民もジーンギスカンは知っていて神と信じており、日本に対していい知れない尊敬をしていた。農場を引き揚げる頃は足も軽く元氣になった。

丸二年の中央アジア生活を終わり、二十三年七月ダモイ列車だといわれて長途の輸送車に乗った。極東に帰るということは大きな喜びであった。

中央アジアを離れるということは、私たち抑留者には氣候の良い天国のような別天地バミール高原に居住したというまたとない思い出を残して極東に行くという事で、ダモイの前ぶれであることに間違いないのだ。

ノボシビルスクに一時停車した後は毎日毎日歩きに歩いた。東チタ、西チタに来ると極東だと思われ、喜びが浮かんできた。左にバイカル湖をしばらく見ることもできた。この日を二年間思い、祈り続けたことが現実となり、広い湖を思い切り眺めた。極東のハバロフスクに着き、落ちついた所は八分所だった。極東に来たという喜び。ここは、呼べば日本に届くような気

持ちのする極東ハバロフスクなのだ。

当分所は伐採が主体で、材木の貨車積みや製材をする分所。今までも政治教育に責めたてられた地区にいたのだが、それほどでもなかった。当地区の恐ろしいほど政治教育の盛んなには頭をひしがれたような思いがした。教育の遅れた地区から来たので常に「教育、教育」と苦しめられた。

ラポーチー（作業）としての伐採も今想像するとゾッとするようなことであった。雪の積もっている道路を自動車は走る。シューバー（毛皮のオーバー）を着てカートンキ（フェルトの長靴）を履き、天にそびえる立木をタポール（斧）、ピラー（鋸）を持って自動車から降りると直ちに二人組は目標を定めて出発する。立木を倒すのは実に愉快なものだ。深山に入り自分の思う木を倒れやすい方を見て習ったように倒す、その段取りの忙しさ。枝を切り落とし、直ちに枝や葉を燃やし始める。そして一定の寸法に丸切りをしていく。材に取れないものはドラワー（薪）とする。材としてノルマを達せない所はドラワーでノルマを上げる。八

時間が二時間くらいにしか思えぬ忙しさだ。自己批判、相互批判により作業能率をぐんぐんと引き上げていく。しかし山の悪い所ではどうしようもなく、ただ苦心をさせられるのみだ。カートンキを履き、綿入れの衣袴を着て、その上にシューバーを身にまとい、身動きが取れないぐらいだ。これで自動車から飛び降り、遠いときは半里くらい雪がひざまである雑木林の中を歩いていると雑木に引つ掛かり倒れることも、深くぼみに落ち込むこともたびたびあった。しかしそのようなことはおかまいなしの行軍だ。定地に到着すると、シューバーを一定個所に脱ぐなり大きな革の手袋で二人引きのピラーとタポールを持ってすぐに二人組で山に入る。その勇ましい姿は演習時の突撃そのものようだ。いよいよ根元直径五〇〜六〇センチの伸びの良い松の木三本を見つめるや、上衣を脱ぎ直ちに退道側方に切り開く。これは必ず実行せねばならない。ピラーを入れようとすると頃は太陽も高い十時になる。根元はできるだけ低く切らないと切り直しをさせられる。枝葉を完全に焼き払う。一分間も力と気を緩めることはできな

い。真剣勝負そのものであり、剣道の掛かり稽古同様に山の中の八時間の作業が続けられる。

ある日このような事があった。タボールで右の太ももを袴の上からきった。赤い血が袴の上にしみ出た。相当きつたなあと思っただけで傷を見ることさえできず、ラーゲルに帰ってみてこんなに大きな傷だったかとびっくりしたことがある。今も傷跡がはっきり見える。この傷跡を見る度に、人間の真剣な時はあらゆるものを超越するものだと思った。

駅が集積場に連れていかれ貨車積み作業をさせられたが、なかなか危険な作業であり要領があるので。息をつく間もないような目まぐるしさで、必死だ。数人で大丸太をころがした（巻くという）。全身全霊で力を出した。力を抜けば直ちに指摘を受ける。休憩時には批判される。しかしこの激しい重労働の割にはあまりにも食糧が少なく、野菜が足りず、自然に体は衰弱していく。負けん気は人より強いつもりだが体がついていかないのだ。押す気はあっても足が出ず、自然に精気もなくなる。日本人が日本人を苦しめる。このよ

うに身体が衰弱したのも日本の青年の変化した連中のせいだと思うようになった。吊るし上げの批判を受けた事もあった。その度に、「自分の体は自分でなければわからない。外観から見てもわかるもんか。力も出ないほど衰弱しているのだ。自分自身で体を守って大事にして生き延びていかねばならぬ。しかしウズベクの時代よりはまだ良い。体を守ることに恥も何もあるものか」と思った。その後医師の診断でOKとなり、作業に出られず収容所内の作業であった。

フェルガナから来た者のうち将校は皆十八分所に転属させられた。取り調べのために禁足だ。作業には出されないが精神的には苦痛並々ならぬ思いをしたのだ。舎内のドラワー切りや掃除で一日を過ごしていた。

人員の移動はかなり激しく、取り調べは盛んに進められた。一回また一回、ダモイの帰国者は歓喜にあふれて帰って行った。しかし私たちの前途はどうなるのか見当がつかなかった。前の赤い煉瓦の家や地区本部で毎日十人くらい取り調べられ、ついに帰って来ない人も何人もいた。昭和二十四年、不安な空気が所内に

ただよった。

十月、恐らく今年最後の帰国梯団だろうと思われる委員長、団長が皆帰国した。また残った者は不安に閉ざされた。自分も作業に出る日がきた。ガラジ（製材所）で製材作業に挑んだ。反動吊るし上げにかかった者の大衆発表は日々に激しく、政治教育は朝六時起床、すぐに政治情報、食事が済みしだい新聞輪読、それによる討論、作業整理、各所でアジ（げき、注意指摘）が飛ばされる。昨夜反動吊るし上げにあった者の大衆発表がある。作業に対する平塚運動（ソ連において日本人抑留者で最もノルマを上げた団体名）者たらんとするげきが出る。音楽とともに赤旗の歌、平塚運動の歌、平和の歌などを歌いつつ出発する。自動車の上では政治サークル討論、本日の作業に対する討論、危険防止討論、自己批判が激烈なので、作業サボをする者はその反動を許されない。昼食後の集合時も午前中の作業上の欠点の批判、討論は激しく、鍛練された。

元氣いっぱい二十三、四歳の青年は良く働き、ノルマを上げると金がもらえた。食えば元気で働ける、

働ける者はまた言える。元氣のない十分の働きのできない者は黙っているより他はない境遇であった。

十八分所より二分所に移動させられたが、二十四年にハバロフスクの軍事裁判所に山崎、田縁、毛呂、宮川は連れて行かれた。そしてソ連で初めてみる斉藤竜藏大隊長に対する軍事裁判に私たちは部下として、保証人として立ち会わされたのだ。ただこのために五年間無用な人生を送ったのだ。裁判長は少将で弁護士も何人かいた。斉藤が興南で共産黨員を見つけたとかつまらないことによるもので、この裁判の結果無罪判決となり、これで安心した。

二分所収容所生活の、昭和二十四年末から二十五年に入ってからのハバロフスクは極寒期だった。十八分所より二分所に来て毎日のように地区事務所に行き取り調べを受けた。どんなに取り調べられても八三一部隊の目的は興南の警備より他には打っても叩いてもあるはずはなかった。二分所に送られたのは厳寒時だ。三級者（尻の肉のない者）は室内作業だったが、二十五年に入るや三級者も皆作業に出ると言われて、三級

者で編成された佐藤組に入った。この政治的な作業の吊るし上げ主義の最中に、佐藤組は多数の平塚運動参加、ブリガータ（働き組）を向こうに回して断固として挑戦し、一月二十六日～二月六日までの間三回優勝旗を取ったのだ。

アムール川の凍結している汽船の周囲の氷を割って角材を周囲に積み重ね、その上に大きなジャッキを乗せる。それを船の周りに一定間隔に準備し一斉に巻き上げをやる。そして汽船のサビ落としをやりコールタール塗装をやる。また鉄板の鋸を切る作業もやらされた。本当に危険だ。零下三十度、風速二十メートルの所に人間が住めるものかと思った。体感温度は零下百五十度以下であるのだ。寒さを超えて痛いほどだ。手や足の凍傷は少ないけれど鼻やほっぺたの凍傷が多い。作業も困難な作業だ。本当に人間の最高の精力と最高の能力をもって最も短時間にノルマを遂行せんとする努力は偉大なものであった。青年隊といわず壮年者がこのような意気をもって日本の再建に馬力をかけたらなあと思われた。

アムール川は広い。そして極寒時には真っ白に凍結する。零下三十八度以下になると作業に行かなくても良かった。また三十五、六度でも風が強ければ作業中止の命が出た。

この分所で児玉政一郎憲兵大尉に会った。延岡中学の三年後輩の特務機関大尉で、二十年の刑を言い渡されたというが、幸い出られてこの分所に送られたという。乾パンを一斗袋いっぱい持ってきてくれたので、毎日かじることができてありがたく感謝した。その後児玉君とは一緒に各分所を回っていたが、二十五年三月の私たちの船より前の船に乗り、船中一大事件を起こした梯団であり、その主人公だったのでだろうと想像した。赤化教育があり吊るし上げされても平気平然としていた連中、反動組が日本の船に乗ったのだ。今までのうっ憤を晴らそうとしたのは当然といえることである。あのように日本人が日本人を苦しめ、汗と油や血を流し骨をむしられるように苦しまされた奴を本当に日本人と思えなかった。共産黨員としてソ連に居残れば良い奴らなのだ。日本に帰れば何食わぬ顔をして

共産の字も口にしない者ばかりだ。

二分所全員、引揚げ集結地ともいうべき二十一分所について来た。昭和二十五年二月二日、「永かったなあ、二、三月中には輸送できるんだぞ、頑張れ」と励まして転属していくこととなった。直ちに身体検査だ。上半身裸体の俺を日本人ドクトルは「十人前に君はOKだ、本当にやせているなあ」と言われた。二分所の意気は引き続き猛烈だ。この教育と作業意欲の旺盛なこの分所に来て早速OKなのだ。人並みに作業隊の一員として出られないのに興奮した。食堂の当番をやらされたが、やはり作業隊の労に感謝せよとの合言葉で指摘批判も多く、足は重く時間の長いのに参った。自分としては本当に重労働だと思った。体が弱っているのに立ちどおしで本当につらかった。

第三次の物価引き下げがあり、ソ連人民も日本人抑留者もびっくりさせられた。政府が突発的に物価引き下げをやることは初めてではないとのことであり、それで国民労働者は豊かになった。五十銭で二〇〇グラ

ム以上のパンが買えるようになった。マガジン（売店）は大したにぎわいだった。

発熱と下痢で作業は何もすることができなかった。栄養食をやるといわれて日に四回食事をさせられた。油や肉、砂糖は多い。パンは白パン五〇〇グラム、穀類八〇グラム。二週間頑張ってやっと食べた。その間、別室にて休憩させられた。

その後中隊に帰り二、三日炊事の方にも行ったが、本当に色々な仕事をやった。二、三カ月真剣に重労働をやるとこの食事では衰弱するということがはっきりし、自分の体について医師以上に知り、愛し、いたわり生きて帰るのだという信念で自分自身で哲学的座禅を常時貫き通した。三月には五七・二キロとなったのにびっくりさせられた。そしてそれは近く帰国だという精神的なものとダモイ食として質も量も良くなったことが原因だと思ひ感謝した。

フェルガナにいた時四十五〜六キロで骨も細り生死の境をさまよった私が、ハバロフスク地区に来てもかわい男だと思われ二年を過ごしたが、今このように

太ったことを喜んだ。しかし日本にいた時は常時運動、剣道をしていて普通六十一キロであった。まだ十分ではない。そして水ぶくれの「カッケ」のような太り方で、真の太りではないのは当然だ。

明優丸に乗って昭和二十五年四月十日ナホトカ収容所に転属。十三日、税関の検査があり鉄条網の柵のある兵舎に入る。残留者との文通通話を禁じられ、十五日再度氏名を呼ばれた。この日をどれほど夢見たことか。この日のためにあらゆる苦勞をしたのだ。身体と心魂を、汗と脂、いや血と肉、いやそれ以上の苦しさ、心の中で幾度となく泣いたことか。病院で次々に死んでいく同僚を見るたびに俺は死なないと発憤した。どんなに弱い男だと思われても、自分の体は自分より外によく知っている者がいるものかと強い信念で生を貫いてきた。今帰国する前になって死亡する者が何人もいた。これこそあまりにも激しい重労働をさせられたためである。激しい労働の裏に、おいしい食事ではなくても良い、量さえあればあのように死ななかつたし衰弱もしなかつただろうことは確信持って言えるのだ。

ソ連から帰らぬ日本人は、若い元気な赤化した日本人が苦しめ、己はノルマを上げて金をもらい食うから元気が出る、そこで元氣のない同僚を苦しめる毎日。少ない食事で衰弱しついに帰らぬ人となった人々が気の毒に思えてならない。生死の境を幾度となく越えてきた一人として、この地まで来たということが夢のように思えてならなかった。

もう心の中では九州延岡の里の山や暖かい春、川、妻子、兄、親戚、亡くなった父母のことが浮かんでくるのみだ。皆僕と同じ気持ちで胸に描きながら歩いている。五九〇中隊は逐次進んでいく、ナホトカ港に向かっていく。ナホトカ、ナホトカと、幾度となく美しく広い堂々たる港を思い描いた。しかし現実のナホトカ港はあまりにも殺風景で港らしくない普通の海岸だった。港の前には小島があり、林というものも見受けられない淋しい港であった。乗船に際して氏名を呼ばれ、二人ずつ腕を組んで乗船した。船内では歌をうたっている。船に足を入れるや入り口には真新しい木製の酒樽に山桜。この木この花が古里の野に山に今をたけな

わと咲き誇っているのだ。ツツジ、ナタネの花が一枝差しである。蜜蜂さえもいるじゃないか。この船がともづなを切りさえすれば安心ができるのだ、船が出なければ本当に安心できないというのが皆の合言葉だった。しかし今回も同船に乗れなかった人がいるじゃないか。今回タモイの人員一六〇〇人だが二五〇〇人くらいは乗れる船だ。一日も早く帰りたい、抑留期間五年半になった今日、皆を帰してくれば良いのにもと思い、残留した者が気の毒でならなかった。

船が出帆して初めてやれやれと胸をなでおろして喜んだ。船内の給食は実に良く、白米だった。みそ汁の甘さも梅干しのうまさも思い出された。船は波が静かで平穩無事、四月十七日午前十時頃舞鶴港に着いた。港の西側の山には桜の花が白く浮き出たように咲いていた。赤い新芽の木々に長年見なかった故国の山河の美しさは例えようもなく、長年殺風景そのものの国を嫌な気持ちで引きまわされ重労働に苦しめられたが、日本のような景色は一回も見たことはなかった。船の中では、ソ連にいたとき反動として吊るし上げられた

連中が一時に元気を出して、国旗を胸に付け日の丸組と言っていた。

魔の国というよりほかに表現のできないソ連の抑留者だからソ連の内側はよくわからないのでうまく言えないが、私たちの頭で考える以上であるというのは想像できる。まず国が広くて大都市以外は家はないと言ってもよいように点々とであるから、大都市以外は学校もない。義務教育は大都市以外はできないし、無学の者の多い国である。数学的知識がない。まず将校になるのだから兵に至っては想像される。ただ愛国心のみを高揚させ、すべての工場、商業、土地、銀行などを国家支配に置き、国民には他国の事は一切知らせず、金を持たせず働かねばならぬようにしてある国だ。頭が良く常に忠実と思われる者でもなかなか党員としての辞令は難しく、また党員は少ない。一市に一人、大工場に一人くらいおり、その党員からならまれたら最後、一生涯浮かばれない人間になり、いつどこにやられるかわからない不安な国であるというのがどこに行っても労働者の言であった。

私たちが出たラーゲルにはどこからか善良な国民を何とか理由をつけて自動車に乗せるなり連れて来て、一定の区域より絶対に出さず重労働をさせ、ノルマを出せ出せと苦しめるのだ。そうしないとその地区の黨員の成績は上がらない。ノルマの国はこうしてきている。本当に愛情のない組織なのだ。だから日本人が日本人を苦しめたのだ。また、罪人の多いことにはびつくりさせられた。どこに行ってもラーゲルがある。ラーゲルにいる者は何かの罪人である。しかし連中はあまり苦にしないのが特徴である。投げた棒が豚に当たって死んだら十五年の刑という。国家の生き物を殺した者は共產主義国家の妨害者であり、共產主義社会の敵である。そのために罪が重いのだ。

舞鶴港に着き、前海兵団の宿舎に落ちつきやっと安心した。

連合軍捕虜として舎内における最後の夕食に酒が出るといふ。五年前に飲んだきりだったので、どんな味だったかなあと頭を本当にかしげた。「食堂に集合」と呼ぶ声に喜んで前海兵団の広い明るい食堂についた。

酒の匂いがブーンと鼻に鋭く感じられ、ああうまい、一口ごとに味をよみがえらせた。酒なくて何で己が桜かな。自然に体内に回る。五勺の酒でしっかり酔っ払ってきた。これもあれも皆国民の血税のおかげなのだ、うまいはずだ。その後には何が起こったか。梯団本部は隔離の状態にあり、その奪還闘争に、ソ連での共産党グループ員、アクチーブが声を大にして奪還するまで当所にとどまるのだと叫び、残留者は別室に集まると呼びかけた。俺の腹は決まっていた。このことは大衆の喜びではないことをはっきり知ったのだ。そのまま現在の室「大広間」に残った。嫌々行く奴ばかりだったが、三分の二くらいは集合したのだろう。翌朝二十三日午前一時半頃、ずいぶん空威張りのことを言っただけで動作をやったが、司令官の厳命によりドヤドヤと下ってきて眠りを覚まされた。

朝早く起床、占里に向かうのだ。懐かしい故国の土を足音高く踏んだ。これが母国日本の土地だ。踏んでも踏んでも温かみのある土地だった。十日間の舞鶴も長かった。気が焦った。暖かい山懐に抱かれたような

気持ちで日本の汽車に乗った。何も変化の無さそうな京都に三十六峰比叡山の山も平然としているのに喜び、大阪となるとまだまだ戦禍の跡が生々しく残っていた。パノラマのごとく映る山も川も都市もただただ喜んで迎えてくれているようにしか思えず、浮き浮きする喜びでいっぱいだった。妻子と別れて五年、あんなにも思いつづけた妻や子や兄や姉、親戚と会える門司駅に着いた。見つけたのは兄だった。良かった。人を押し分けて近づいた。ただ涙あるのみだった。ツルエ(妻)も姉も来ていた。車中色々持ってきた食物をあれもこれもと出されたが、胃が小さくなっているように入らない。ただただ「良かった、良かった」と言うのみだ。車中かいつまんでソ連の生活状況を話した。延岡駅に久しぶりに降りた。同窓、知人の出迎えを受け、一同に一言の挨拶をせよとのことで大声でお礼を申し上げ、今後のご支援とご鞭撻をお願いした。なつかしい延岡、この古里に大声をあげて感謝の言葉を言う気持ちが出た。その夜は吉野町の兄宅(実家)に泊まり、亡き父母に心ゆくまで帰国の挨拶をして、子供を抱き

しめる喜びにあふれた。

【執筆者の紹介】

宮川氏は全抑協宮崎延岡支部の会員として活動し、家業は剣道場を開き多くの師弟を教育しておられたが、シベリアでの生活が原因かは判りませんが、昭和五十五年三月一日に残念ながら他界されました。

宮川氏が亡くなられてからも、会員としてその後も奥様のツルエ様が加入しておられました。宮川氏は、ソ連から帰国直後の昭和二十五年四月二十二日から「ソ連強制抑留記」を執筆されました。その一部を私が頂戴しておりましたので、その手記をそのまま代筆しました。内容は実に克明詳細に記されており、またとなない手記であると思います。

(宮崎県 大野 梅吉)